

タイトル：学習者コーパスに基づいた日本語の複合動詞の習得研究—発話機能が複合動詞の使用状況に与える影響を中心に—

氏名：姚一佳

所属：上智大学言語科学研究科 言語学専攻

キーワード：複合動詞 使用実態 タスク 『発話対照データベース』 日本語教育

要旨：

日本語には、「書き終わる、投げ捨てる」のように、二つの動詞が接続した複合動詞が豊富に見られる。複合動詞は日本語母語話者の言語生活で重要な位置を占めている(e.g., 森田 1978, 村田 2013, 村田・山崎 2012, 2015 etc.)のに対し、日本語教科書と教育現場での取り扱いが少ない、日本語学習者にとって習得しにくい項目の一つである(e.g., 松田 2000, 2004, 陳 2007, 2008, 2010, 玉岡・初 2013 etc.)。今までの先行研究は複合動詞の習得困難点(e.g., 松田 2004, 松田・白石 2006, 白 2007 etc.)及び使用実態(e.g., 村田・山崎 2012, 2015, 陳 2007, 2008, 2010, Hokari, T. et al. 2012, 志賀 2018 etc.)について調べてきた。その中、学習者コーパス(陳 2007, 2008, 2010, Hokari, T. et al., 2012, 志賀 2018)を用い、日本語学習者の複合動詞の使用実態を分析し、その使用傾向を把握したものもあるが、今まで行われたコーパス調査を通して複合動詞の産出状況を把握した先行研究は主に OPI テストでの発話データ(陳 2007, 2010, Hokari, T. et al. 2012)や作文データ(陳 2008, 志賀 2018)を取り扱ったが、同じタスクを前提にして、母語話者と学習者の発話データを比較し、学習者の産出状況における問題点を明らかにした研究は管見の限りまだない。また、使用されたタスクは複合動詞の使用状況に与える影響についての検討もまだ少ない。

本研究は国立国語研究所で公開されている日本語学習者による日本語/母語発話の対照言語データベース(略称:発話対照DB¹)におけるロールプレイ(第1期)データを用い、同じタスクにおける異なる言語を母語とする日本語学習者(タイ人 14 名、中国人 20 名、韓国人 21 名)と日本語母語話者(22 名)の複合動詞の産出状況を比較し、学習者の複合動詞習得における問題点及び使用されたタスクが複合動詞の使用分布に与える影響を明らかにした。

発話対照 DB に収録されている 300 本の会話データから複合動詞を抽出し、分析した結果、以下の 3 点が明らかになった。(1)日本での滞在期間及び母語に関わらず、同じタスクにおいて、学習者による複合動詞の使用数は母語話者より少なかった、(2)母語話者が複合動詞を使ったところで学習者は単純動詞や「VテV」を使用していた言い換え現象がよく見られたが、その中に不自然な言い換えや意味伝達に影響が出る表現も見られた、(3)複合動詞の産出状況はタスクからの影響を受けていて、「依頼、断り、受諾」のタスクに比べて「謝罪、抗議、許し」のタスクにおける複合動詞の使用数がより多い、またこの影響は学習者と母語話者の産出にともに見られた。この結果は複合動詞の使用分布の差と発話機能との関係を示唆した。

今回の調査結果は母語話者と学習者の複合動詞の使用状況を比較し、学習者の複合動詞使用における問題点を明らかにし、母語、滞在期間及び発話機能が複合動詞の使用状況に与えた影響を再検討した。また、今後複合動詞の生産性を高めるための効果的な指導方法を検討する必要があることを示唆した。

¹ http://contr-db.ninjal.ac.jp/speech_01.html